

Retrospective evaluation of the utility of two-step surgery for facial basal cell carcinoma and squamous cell carcinoma

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2023-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯野, 志郎, Iino, Shiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029361

学位論文審査の結果の要旨

※ 整理番号		ふりがな 氏 名	いいの しろう 飯野 志郎
学位論文題目	Retrospective evaluation of the utility of two-step surgery for facial basal cell carcinoma and squamous cell carcinoma 顔面の基底細胞癌と有棘細胞癌における 2 期的手術の有用性に対する後方視的検討		
審 査 委 員	主査 五井 孝亮 副査 小林 基三 副査 長谷川 裕		
基底細胞癌や有棘細胞癌は、高齢者の顔面に好発する代表的な皮膚癌である。外科的治療が第一選択となるが、手術の侵襲や後遺症を出来るだけ減らしながらも、根治的な治療が必要となる。本邦では通常 1 期的手術（One-step surgery; OSS）が行われるが、以前より申請者は腫瘍切除後に創に人工真皮を装着して肉芽形成を促し、その間に病理組織所見を確認したうえで全層植皮を行う 2 期的手術（Two-step surgery; TSS）を積極的に取り入れてきた。本研究では、顔面の基底細胞癌と有棘細胞癌の手術症例 150 例を後ろ向きに解析し、TSS と OSS とを比較して有用性について検討した。OSS を施行した症例は 104 例、TSS は 46 例であった。男性 77 例と女性 73 例で、年齢の中央値は 83 歳であった。腫瘍径と切除マージンは、OSS 施行群よりも TSS 施行群で有意に大きかった（$p=0.03$）。1 回目の切除において切除断端に腫瘍細胞が陽性だった症例は 6 例あり、そのうち 4 例（OSS1 例、TSS3 例）に対して追加切除を行った。追加切除後の断端は全て陰性で、本研究において局所再発例はなかった。TSS における術後後遺症の頻度は、OSS よりもわずかに低かったが、統計学的有意差はなかった（TSS 17.4%、OSS 27.9%、$p=0.16$）。再建法別の術後後遺症の頻度は両群間で有意差はみられなかったが、OSS 中のオープントリートメント症例に限って比較すると、TSS よりも有意に多かった。TSS の 2 回の手術時間の平均値は OSS の 1 回の手術時間よりも有意に短く、多変量解析では垂直欠損範囲（脂肪組織より下層 vs. 脂肪組織内、推定値：-0.28 時間、$p<0.001$）と術式（OSS vs. TSS、推定値 -0.13 時間、$p=0.03$）が手術時間と有意に相関していた。全身麻酔の割合は、TSS の方が OSS よりも少なかったものの、統計学的有意差はなかった（OSS 17.3%、TSS 9.8%、$p=0.12$）。TSS の 1 回目の手術と 2 回目の手術の間の待機期間に高度の有害事象はみられなかった。以上の結果から OSS、TSS 両術式共に局所における腫瘍の根治性は高いと考えられた。また術後後遺症を減らすためには、オープントリートメントを行うよりは TSS を選択すべきであることが示唆された。TSS は 2 回の手術行程を経る必要があるが、それぞれの手術時間は OSS よりも有意に短くなった。この事は手術時間の長い 1 つの手術を、2 つの短時間の手術に分割できる事を示しており、合併症や超高齢のために長い手術が不可能であった症例に対しても TSS を適用することで治療ができる可能性が示唆された。本研究は顔面の皮膚癌に対する TSS 手術の有用性を検討した初めての研究であり、本学学位論文として十分価値あるものと認める。 （令和 4 年 11 月 1 日）			

最終試験の結果の要旨

※ 整理番号		ふりがな 氏 名	いいの しろ 飯野 志郎
学位論文題目	Retrospective evaluation of the utility of two-step surgery for facial basal cell carcinoma and squamous cell carcinoma 顔面の基底細胞癌と有棘細胞癌における 2 期的手術の有用性に対する 後方視的検討		
審 査 委 員	主査 五井 孝志 副査 小林 基弘 副査 長谷川 稔		
口頭 上記の者に対し、 筆 答 により、学位論文を中心とした関連分野について試問 合格 を行った結果 不合格 と判定した。			
(令和 4 年 11 月 1 日)			